

江田弘良氏の「風景写真展」閲覧記3

令和3年9月28日 記:高岡一人

展示会場:坂野記念館(岡山市北区栢谷)

閲覧日時:令和3年9月28日午後

1. 展示場入り口



題「マジックアワー」

夕刻であろうか、赤く染まる稜線を挟んで黒い台地、紫色の大空、想像を絶する彩の妙である。なかなか狙って撮れる瞬間は少ないのではないだろうか。見ると表題は「マジックアワー」とある。なるほど、この不思議な色合いを醸すほんの少しの時間はマジックなのかも知れない。言い得て妙な表題である。

2.展示室内



題「干潟のある風景」

夕焼けの空と美しい曲線を描く干潟の水たまり。とても幻想的な風景だ。それにも増して色合いの美しさがなんとも綺麗。



題「普門寺」



題「憩いの森」

真直ぐに天に向かって伸びる樹々、直線的な模様が実に雄大さを感じさせる風景だ。表題は「憩いの森」である。下の方に人物が小さく存在し、きっと寛いでいるのだろうと想像をめぐらす。



表題「曙(あけぼの)」

瀬戸内の多島美、朝日を浴びて輝く水面がまだ暗い周辺にまぶしい光を放つ神秘的な光景。



題「寸光清風」

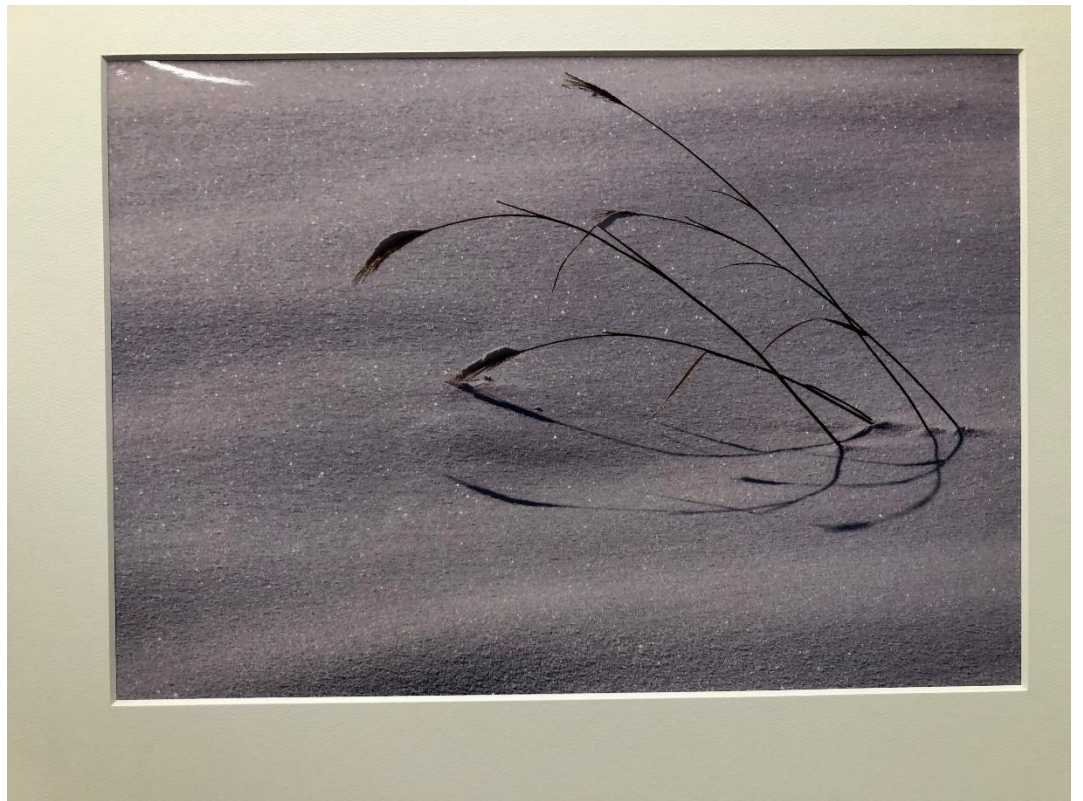
水しぶきに木漏れ日が差し込み幻想的な世界を作り出している。どこかから妖精が現れそうな素敵な世界を写し撮っている。寸光とは「一寸光陰」から導かれた言葉で、ほんのわずかな時間も無駄にしてはならないという意味らしい



題「紅さず雲海」

早朝の雲海が朝日に照らされて紅をさしたように薄赤く染まっている様、写真には撮影者がガラスに反射して写りこんでしまった。ご容赦を！

紅さず雲海
2024.10.10



題「フィナーレ」

砂丘だろうか？砂に埋もれたススキが数本、なんでもなさそうだが撮影者の感性が思われる作品だ。一連の作品をぐるりと巡った一番最後に掲示されていた作品。そういう意味でフィナーレなのだろうか？作者の意図は知れないのだが勝手にそう思うとこれも悪くないなあ。

<終わりに>

作品は全部で 20 数点ありました。全部は紹介しきれませんので記者の好みで数点を紹介させていただくこととなりましたことをお断りしておきます。

すべての作品を通じていえることは撮影者の感性に光るものを感じることができるということです。次回の展示会を楽しみにしたいと思います。

記者：高岡一人